

「廣井勇賞」受賞の高知大学生
小樽港湾事務所で研修

～廣井勇 生誕150年～

實ニ技術者千歳ノ榮辱ハ懸テ設計ノ上ニ在リ

上記の言葉は、明治31(1898)年(小樽港北防波堤着工の翌年)に廣井勇博士が著作「築港卷之一」の緒言に書かれているもので、「技術者が千年に亘って問われ続ける誉れと辱めとは、設計の立て方にある」という意味です。

明治30(1897)年、日本に「港湾」に関する学問がない時代に、初代小樽築港事務所(現小樽港湾事務所)長 廣井勇博士は日本で初めて大海に伸びる防波堤建設に着工しました。海水の影響を受けないコンクリート・ブロック製造方法の確立に始まり波に耐える構造の様々な研究と実証に基づく、小樽港北防波堤は100年以上経った今も有効に機能し、平成12(2000)年には土木学会選奨「土木遺産」、平成13(2001)年には「北海道遺産」に指定されています。



廣井 勇博士
(1862-1928年)

その廣井勇博士の出身地高知県から、高知工科大学の学生が、8月29日(水)小樽港湾事務所を訪れました。高知工科大学では「廣井勇賞」を設け、受賞者が実際に廣井博士の功績を学ぶことを目的に今年で6回目の来所になります。

「廣井勇賞」とは、高知が生んだ先駆的技術者である廣井勇博士の名を冠し、「清きエンジニアとしての資質とリーダーシップを持ち合わせた者」として、同級生と教職員が推挙する学生に授与される賞です。



港湾業務艇「ひまわり」から小樽港内を見学



今年も受賞した学生6人が引率の方とともに来所し、小樽港の歴史に関する座学や北防波堤の実地見学を行いました。

事務所に到着した学生達は、まず港湾業務艇「ひまわり」に乗って小樽港内を見学。事務所職員の説明を聞きながら、波で揺れる船の中、メモを一生懸命に取っていました。

港内見学後、事務所の会議室にて事務所職員による座学を受講し、日本近代築港の原点といえる小樽港北防波堤の歴史を通じて、廣井勇博士の功績を学びました。



会議室にて座学



座学で質問する学生



「みなとの資料コーナー」でも熱心に事務所職員の説明を聞き、メモを取っています

座学終了後は事務所内に設けている「みなとの資料コーナー」で、現存する関係書類や写真、各種模型等を職員の説明を受けながら見学しました。今年は「廣井勇生誕150年」という節目の年ということで、報道取材も数社ありました。

最後に事務所敷地内に保管されている長期耐久性試験用モルタルブリケットを見学。廣井博士がコンクリートの確実性を得るために開始した耐久試験の試験体(モルタルブリケット)の実物に触れ、古いものは100年以上も保存されていることに驚いていました。

学生の一人は「廣井勇博士の名は、大学に入学してから初めて知ったが、そのすごさを知りびっくりした。」と語ってくれました。短い時間ではありましたが、廣井博士の偉業を実際に目に焼き付けて、これからの大学での学習に役立てていただきたいと思います。



モルタルブリケットが保管されているケースがずらりと並んでいます

高知県視察 小樽港

高知工科大学来所の1週間後、9月5日(水)には、同じく廣井勇博士の出身地高知県から県議会議員8名が事務局の方とともに小樽港湾事務所を訪れました。

事務所内で「小樽港北防波堤の役割と今後の課題」について、事務所職員の講義を受講。議員の方は企画建設委員会ということもあり、「北防波堤の構造や、災害・被災」に関する質問が多数出で、県事務局の方が時間を気にするほど、活発な状況でした。

講義後、「みなとの資料コーナー」を見学して

から、港湾業務艇「ひまわり」に乗って小樽港内を視察、事務所職員の説明に真剣に耳を傾けていました。明治41(1908)年に完成し、今も現役の小樽港北防波堤を間近で見た県議の方々は、その映像をカメラに収めていました。

高知県が輩出した偉人の一人である廣井勇博士が成し遂げた、世界に誇る港湾整備について学んだ議員の方達は事務所を後にしました。



講義受講風景



「みなとの資料コーナー」でも多くの質問がありました



カメラで小樽港北防波堤を撮影



北防波堤の「斜積みブロック」



次の視察地に向けて出発